本宮市（もとみや）（福島県）

便利さと自然がちょうどいい「福島のへそのまち」オンリーワンの住みよさへの評価は全国注目の的

本宮ＩＣを中心に多くの企業・事業者が立ち並ぶ本宮市は、内陸型物流工業都市として成長を続けている

明治20年開業の本宮駅。野口英世は19歳のとき、大志を抱いて本宮駅から初めて上京した（駅横には野口英世の像もある）

要因は多種多彩!! 18年で13回の住みよさナンバーワン

東北地方南部の福島県は、県域東部が太平洋岸と阿武隈高地（阿武隈山地）に挟まれた《浜通り》地域、県域中央部が阿武隈高地と奥羽山脈に挟まれた《中通り》地域、県域西部が奥羽山脈と越後山脈に挟まれた《会津地方（会津盆地）》という、三つの地域に大きく区分されている。県域東端が太平洋に、西端が越後山脈に面している福島県は、さらに阿武隈高地と奥羽山脈によってほぼ縦割りに、例えば気象情報（天気予報など）が発信される際の地理的区分ともなる、三つの特徴的な地勢を持つ地域に区切られているのだ。

そのうち中通り地域には、中通り北部に位置する県都・福島市（人口約27万人）と、中通り中央部にあって県内最大の人口約32万人を擁する郡山市（中核市）が位置している。

さらに中通り中心部の郡山市に隣接し、福島県全域のほぼ中央部にも位置することなどから「福島のへそのまち」として知られる本宮市は、平成19（２００７）年1月1日、旧安達郡本宮町と同白沢村との新設合併により、新市の歩みを開始した。

来年（令和９／２０２７年）1月1日には、市制施行20周年の節目を迎えるが、市制施行以後、本宮市が展開してきた各種施策を通じた市としての成長ぶりと高い評価には、非常に目覚ましいものがある。

具体例を挙げれば、「住みよさランキング」（東洋経済新報社）において、本宮市は市制施行の平成19年から令和７（２０２５）年までの18年間で「福島県内第1位」を13回も獲

高松義行（たかまつぎぎょう）
本宮市長

得。直近の令和5（2023）年から令和7年は、3年連続で第1位の座に輝いている。さらにその間の平成22（2010）年には、全国812市区*のうち総合26位、令和7年は全国総合86位にランキングされている。

こうした高い評価の要因は、本宮市の総合的に優れた「環境」にある。まず挙げられるのは、「こおりやま広域圏」（総人口約60万人）の内にあって、前述のように、本宮市が県内最大の商業集積を持つ郡山市に隣接していることだ。

加えて市域内には現時点で12の工業団地がある。製造業を中心に物流業、卸売業などの企業・事業所が多数立地しており、本宮市は内陸型物流工業都市としての実績が高く、活力ある産業都市（面積当たり・人口一人当たりの製造品出荷額は福島県内13市中第1位）としても知られている。

北上川に次ぐ東北地方第二の大河・阿武隈川。暴れ川としても知られるが、沿岸地域の母なる川として古来、大地を潤してきた

河口部で阿武隈川と合流する安達太良川。遠方に見えるのは安達太良山

郡山市の単なる衛星都市、ベッドタウンではない。福島県の工業集積を担うような位置づけにあり、本宮市自体にも自立した都市にふさわしい豊富な雇用の場が形成されているのだ。

本宮市に企業集積が進む最大の要因は、優れた交通環境にある。本宮の地はもともと、会津街道・相馬街道・三春街道が交差しており、近世から近代にかけ宿場町としてにぎわった歴史的背景を持つが、現代の本宮市の交通の要衝ぶりはさらに進んでいる。

新幹線の停車駅を有する郡山市中心部から15㎞圏内に位置し、JR東北本線の二つの駅（郡山駅から各駅停車で三つ目／約15分の本宮駅、二つ目／約10分の五百川駅）を持つ本宮市には、国道4号線に直結する東北自動車道・本宮ICもある。東北地方を南北に縦断する東北自動車道と、東西に横断する磐越自動車道が交差する郡山JCTにも近接している。

本宮市の中心部からコンパスを30㎞圏内に広げれば、県都・福島市（東北本線・福島駅から本宮駅までは各駅停車で約30分）や、福島空港（福島空港ICから本宮ICまで約40分）も入ってくる。

このように本宮市は、東北・磐越・首都圏の各地方を陸路・鉄路でつなぐとともに、空路で全国ともつながる結節点の役割を果たす交通の要衝であり、同時に自然環境にも優れている。

例えば、本宮市を構成する旧本宮町エリア（市域西側／39・54㎢）と旧白沢村エリア（市域東側／48・40㎢）の境界線に近い市の中心部には、市域を南北に貫流する大河・阿武隈川が流れている。阿武隈川には市域中央部で安達太良川（阿武隈川水系）が注ぎ込んでおり、市域にはやはり阿武隈川の支川である五百川、白岩川、仲川なども縦横に流れている。また市域東側には阿武隈高地を成す山々が、西側には安達太良山を含む奥羽山脈がそびえている。

こうした豊かな自然環境下にある反作用

＊同ランキングによると千代田区、中央区、港区の3区は対象から除外

車いすなどでも利用できるインクルーシブ遊具やドッグランを備える恵向公園。グラウンド・ゴルフも楽しめる

安達太良川と阿武隈川の合流地点近くに立地する親水公園「みずいろ公園」は市外からの利用者も多い交流拠点だ

として、戦後最大の総雨量を記録した「令和元年東日本台風（19号）」など、本宮市や周辺地域は幾度となく洪水被害に見舞われてきた。それを踏まえた上で、市域を囲む豊かな山・川の景観と、そうした厳しくも豊かな自然環境がもたらす大地の恵みは、何物にも代えがたい地域財産なのだ。

実際、本宮市においては、年間を通じて比較的温暖な気象条件（年間平均気温13度）なども相まって、古来、稲作を中心に高品質な農産物が産出されてきた。中でも現在、植え付けからわずか100日で収穫できる米の品種として人気のブランド「五百川」は、本宮市を発祥の地としている。

総人口（令和7年11月1日現在で2万9618人）こそ、平成21（2009）年の3万1757人をピークに、現在も微減が続いている。しかし、人口減少は首都圏など一部地域を除けば全国共通の潮流であり、そうした中での本宮市の人口減少率は非常に低い。

東日本大震災、令和元年東日本台風による影響などで一時的に目立つ減少期はあったものの、そこからの回復を経た上で、社会動態人口はむしろプラス傾向を維持している。14歳以下の年少人口の割合も近年、福島県内13市中の第1位（約12％）を維持。生産年齢人口の占める割合も県内第2位（57・8％）だ。

「住みよさ」への定評や、自然環境と産業構造のバランスの良さにも優れた本宮市には、同時に「赤ちゃんからお年寄りまで」バランスよく行政サービスが行き届いており、持続可能な近未来の構築に必要な、ポジティブな要素が随所に芽吹いているといえる。

自然災害からの復旧を通して痛感 情報発信と連帯の重要性

「平成の大合併で新設された全国の都市の多くが、近年、続々と市制施行20周年の節目を迎えています。福島県内には現在、13の市がありますが、町村の合併で新たに発足した市は田村市、伊達市、本宮市の3市だけです。本宮市はその中でも最後、県内全体の合併事例の中でも最後から2番目の平成19年に誕生したため、市制施行20周年の節目は令和9年1月1日に迎えることになります。

本宮市は平成19年1月1日の市制施行から現在は18年目（※取材は令和7年9月26日）に当たるわけですが、私が市長に就任したのは平成23（2011）年2月。東日本大震災発生の1カ月前でした。

東日本大震災では、本宮市も非常に大きな揺れ（震度6）を記録しました。道路をはじめとするインフラ部分の被害、公共施設や住宅の全半壊などの被害を広範囲にわたって受けました。しかし、幸いなことに人的被害はありませんでした。

もちろん、原発事故を受けての除染作業などを含め、震災からの復旧・復興には大変な労苦を伴いましたが、半面、その際に手厚い支援を頂戴した埼玉県上尾市さんとは平成25（2013）年に友好都市協定を結んで緊密な交流が現在も続くなど、ありが

県立本宮高校と本宮市は包括連携協定を結び、さまざまな連携活動を行っている（しらさわ秋祭りへの出店の模様）

たいことに新たな絆の輪も広がっています。

本宮市が《全国へそのまち協議会》に加盟したのも、東日本大震災をキッカケに、遠隔自治体同士の連携関係がいかに大切かということを痛感し、前向きで積極的な情報発信がいかに重要であるかということを、さまざまな意味で体験したからでした。

災害という意味では、令和元年東日本台風の方が、むしろはるかに大きな被害がありました。市域中心部を流れる阿武隈川の越水や、安達太良川の堤防の決壊が発生しました。これによって中心市街地が広範囲にわたって洪水に見舞われ、１４００棟以上もの家屋が浸水しました。東日本大震災の際にはなかった人的被害においても、７人もの尊い人命が失われました。

しかし、それだけに一層、全国の多くの都市と同様に人口減少が始まってはいるものの、それを乗り越える形でもたらされている、本宮市に対する近年の『住みよさランキング』などによる評価の高さは、非常にありがたい。まちづくりの方向が間違っていないことを示す貴重な客観情報として、励みにさせていただいております」

そう語る高松義行本宮市長は、旧本宮町の出身だ。実家が寺院だったため僧籍を持つが、「社会勉強のつもり」（高松市長）で大学を卒業後、旧本宮町役場に入職した。５年間の勤務の後、実家の副住職を務めるかたわら、地元ロータリークラブや青年会議所で多彩な社会活動を経験。その過程で醸成されてきた「地域振興への思うところ」（高松市長）が積み重なり、平成７（１９９５）年に町議会議員選挙に出馬して当選。本宮町議を３期、合併後には本宮市議を２期務め、初代市議会議長、もとみや青年会議所理事長などの要職も歴任。平成23年１月実施の本宮市長選への出馬と当選に至った。令和８（２０２６）年２月に、就任から４期16年目を迎える。

「先ほども申し上げた『住みよさランキング』などによる高い評価は、総合的な意味合いからの本宮市の住環境の良さをほめていただいているわけですが、本宮市は都市的な集積が進みつつある旧本宮町地区と、私たちの故郷の伝統的な里山風景が広がる旧白沢村地区とで構成されており、両地区の面積はほぼ同じです。

人口は鉄道駅があって利便性の高い旧本宮町地区に偏りがちで、人口動態だけを見ると、旧白沢村地区は人口減少が進みつつあるともいえます。しかし、私は旧白沢村地区の景観こそは、本宮市の原風景だと考えております。従いまして、生活の利便性以上に、そこをほめていただくと本当にうれしいのです（笑）」（高松市長）

令和３（２０２１）年に東西アクセスロード（自由通路）が完成したばかりのＪＲ本宮駅を出て、阿武隈川方面に向かう道すがら、最初に目に映るのは、令和元年東日本台風の浸水被害を見事に乗り越え、復旧を果たした、中心市街地の美しい街並みだ。

そこを抜け、さらに阿武隈川を渡り、旧白沢村地区へと歩を進めるとすぐに、私たち現代人がイメージする、懐かしくも美しい典型的な日本の里山風景が目の前に広

「ふるさと暮らし体験住宅・和暮和暮」の周辺には懐かしくも美しい里山風景が広がっている

黒光りした梁（はり）が古民家の歴史を物語っている「和暮和暮」内部

がってくる。その風景の転換の仕方は非常にスムーズかつ鮮やかだ。高松市長の言葉にもある通り、現代の本宮市を構成しているのは、現代的なニュータウンの趣（おもむき）を持つ旧本宮町と、オールドタウンとしての奥深さを持つ旧白沢村との絶妙なマッチングの結果なのだということが、おのずと納得される。

地域の原風景は里山
特徴的な情報発信で図る交流人口増大

「旧白沢村地区には、令和6（2024）年にオープンした《ふるさと暮らし体験住宅・和暮和暮（わくわく）》があります。古民家をリノベーションした5LDKの住宅で、本宮市への移住を希望する人などが、個人でもご家族単位でも、本宮市での暮らしを体験できる『お試し住宅』（※連続7日間／年間14日間利用可能）です。この施設を郡山市や首都圏などへの移動にも便利な本宮駅の周辺ではなく、里山風景の真っただ中に設置したのには理由があります。

移住希望の方が、最終的に本宮駅周辺に引っ越して来られるのだとしても、その前に本宮市の奥深くに残る、自然豊かで伝統的な農村部（里山）の暮らしをまず体験していただきたい。本宮市の本質を少しでも多く知っていただいた上で、私たちのコミュニティの一員として、生活を開始していただきたいからなのです」（高松市長）

本宮市には「みずいろ公園」「恵向公園」など公園が数多くあり、《プリンス・ウィリアムズ・パーク》をはじめとする特徴的な公共施設が多い。中でも《プリンス・ウィリアムズ・パーク》内の《英国庭園》は、平成27（2015）年2月、英国王室・ウィリアム王子（現皇太子）が訪問（当時の安倍晋三首相も同行）されたことをキッカケに、日英の友好と東日本大震災からの復興の証として整備されたという、全国的にもユニークな出自を持っている。

英国風ローズガーデンを中心に四季折々の表情を見せる同庭園は、前出の上尾市との友好都市協定が紡いできた緊密な絆（連携関係）の輪と同様に、本宮市と英国（ケンジントン&チェルシー王室特別区）との友好協定を結ぶ絆の輪を象徴する、市民にとって非常に重要な存在の公園となっている。そして、英国との絆（交流）は、市内中学生の英国訪問・交流や、英国の要人の本宮市訪問など、さまざまな形で現在も続いている。

《プリンス・ウィリアムズ・パーク英国庭園》から徒歩20分ほどの《本宮市立しらさわ夢図書館（以下、しらさわ夢図書館）》も、非常に特徴的な公共施設だ。本欄ではこれまで全国の特徴的な図書館を訪ねてきたが、しらさわ夢図書館は全館カーペット敷きであるところが大きな特徴だ。利用者は靴を脱いで上がるのだが、大人も子どもも、他の利用者の通行の妨げにならない限り、カーペットの上でごろりと横になってもとがめられない。

それは実は高松市長のアイデアで、そこに

ウィリアム王子の訪問をキッカケに始まった本宮市と英国との交流は今年で12年目。令和7年には「プリンス・ウィリアムズ・パーク開園10周年記念式典」が開催された

本宮市と英国との交流のシンボル「英国庭園」は　バラの季節にひときわ輝く

プリンス・ウィリアムズ・パークは、家族単位の利用だけでなく、近隣の保育園・幼稚園単位の利用も多い

「本宮市立しらさわ夢図書館」「本宮市白沢公民館」と同じ敷地に立地する「本宮市ふれあい美術館」（英国自動人形の収蔵数は全国随一）

は「とかく硬い規則にしばられがちな図書館を、利用者が心身共にリラックスして、本の世界を楽しんでいただける場にしたかった」との高松市長の思いが込められているという。

そのためもあって、リクライニングチェアが何台も並ぶコーナーや、はだしのままくつろげるサンルームも備えられている。リラクセーションの場と本に囲まれた図書館が混然一体となった、本好きにはまさに「夢のような図書館」である。

全面的にカーペットが敷かれた「本宮市立しらさわ夢図書館」。図書館でありながら地域の人々の憩いの場にもなっている（令和7年12月からは電子図書館サービスも開始）

こうした居心地の良さをつくる発想の一つ一つが、本宮市の住みよいまちづくりにつながっているのかもしれない。

以上述べてきたように、本宮市における全国でも有数の「住みよさ」を形成する要素は実に多岐にわたっているが、住みよさを発信するシティプロモーションにも特徴的な試みが多い。

例えば、本宮市のイメージキャラクターは「本宮市の木」でもある「まゆみの木の実」をモチーフとする「まゆみちゃん」だ。

「まゆみちゃん」は友好都市・上尾市のイメージキャラクター「アッピー」と平成26（2014）年に結婚。2人の間に生まれた「あゆみ」を子育て中という設定も併せ持つなど、両市の交流のシンボルともなっている。同時に「まゆみちゃん」は、全国の「まゆみという名を持つ人たちに本宮市への興味を持ってもらい、関係人口・交流人口を創出しよう」との発想で令和2（2020）年からはじまった「全国まゆみちゃん交流プロジェクト」（田植え体験や地域の祭りへの参加などさまざまな交流・協働事業を通して元気を発信するプロジェクト）というユニークな企画の基にもなっている。

「もとみや秋祭り」の名物、女性の担ぎ手だけが参加できる「真結女（まゆみ）御輿」

イメージキャラクター「まゆみちゃん」にちなんで始まった「全国まゆみちゃん交流プロジェクト」には国内外から「まゆみさん」が参加する

「市制施行以後、東日本大震災や令和元年東日本台風、新型コロナウイルスなど、苦しい思いもたくさんしましたが、その都度、課題に向き合うことでさまざまな人たちがバックアップしてくれました。

成果が出るまでには何事も時間がかかります。しかし、決して焦ることなく、人と人とのつながりを大切にしながら、先輩方がつくってこられた良いものを、これからも大切に受け継ぎ、よりよいまちづくりへ、着実につなげていきたいと思います」（高松市長）

《少欲知足》を座右の銘とし、「理想を具現化するために首長への道を選んだ」と語る高松市長が目指す「さらに住みよいオンリーワンのまちづくり」への今後の歩みが、より一層に注目される。

（取材・文＝遠藤隆／取材＝令和7年9月26日）